

## 銀閣寺の発掘調査

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



銀閣寺庭園（南西から）中央手前に調査区

文明14年(1482)、足利義政は如意ヶ嶽山麓に山荘の造営を開始した。この山荘が、今も銀閣寺として知られる慈照寺の前身である東山山荘である。義政は、すでに文明5年(1473)将軍職を子の義尚に譲っており、隠居後の別荘として山荘の造営を計画した。

約10年間続いた応仁の乱が文明9年(1477)によようやく終息したとはいえ、さらなる動乱をむかえようとしている時でもあった。

義政はその生涯に趣味的ともいえる程にいくつかの御所と別荘の造営を行なうが、その最後が東山

山荘であり、義政のもてる力と趣味と、当時の技術を結実させたものといえる。しかし、現在、創建当初の建物の多くは失われており、わずかに観音殿(銀閣)と東求堂(持仏堂)が残るのみである。

東山山荘は、二つの尾根にはさまれた谷を造成してつくられている。東西約180m、南北約200mがその範囲である。主要な施設は谷筋の平坦地につくられたが、尾根筋にもいくつかの建物が存在したようである。

1993年、慈照寺境内で防災設備の整備にともない発掘調査を行な

い、東山山荘創建時の注目すべき遺構をいくつか発見した。その中で石を積み上げた溝と石製の導水施設について紹介する。

境内の北東部で検出した石を積み上げた溝は、一部しか調査できなかったが、その構造は注目すべきものがある。溝の規模は、幅0.8m、深さ1.2mを測り、東山で切り出された長方形の花崗岩の割石を積み上げている。山側の石積みの上には、さらに石を積み上げ石垣としている。合わせると2.4mの高さに積み上げられていることになる。石材は大きいもので、一



石垣と溝（西から）



石製導水施設（西から）

辺1.2 mある。石垣といえば、安土桃山時代の城郭に盛んに用いられ始めるが、この石垣は、これに先立つこと約半世紀であり、その系譜が注目される。

調査では、さらに注目すべき遺構として、この石垣の南約30 mのところで検出した石製導水施設がある。導水施設の構造は、花崗岩の切石を組み合わせており、大きく上石と下石にわかれる。下石一つの大きさは、長さ90cm、幅30cm、厚さ20cmを測る。下石には上面に幅5cm、深さ5cmの

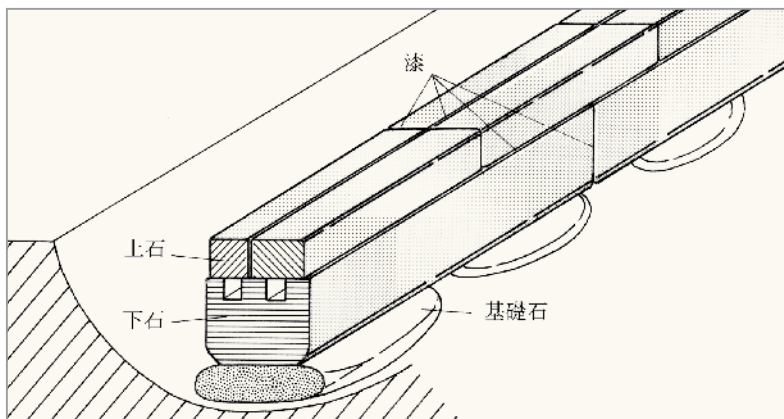
2条の溝がうがってあり、この溝に水が流れていたと考えられる。上石は2条の溝をそれぞれ蓋をするように2石置かれている。さらに水が漏れないように石と石の間には漆を染み込ませた布で目地をほどこしている。

この導水施設の水源は山からの湧き水と思われるが、水が汚れない構造になっていることから、飲料水に利用されていた可能性が考えられる。石製の水道管は、一般的には江戸時代になって城下町が形成され、飲料水の確保が問題に

なりだしたときに上水道が整備されると共に登場するが、室町時代のものとしては他に例がない。茶の湯に造詣の深かった義政が、清らかな湧き水を建物付近に引かせたのかもしれない。

同時期のものとして例のない構造をもつ遺構二つについて見てみた。これらは当時の最先端の土木技術を集めたものといえる。このような土木工事をどのような人達が行なったのかは不明であるが、義政と庭師善阿弥の関係は当時から有名であり、義政は庭づくり以外の土木技術にも関心が高く、それがこのような遺構として残ったのかもしれない。

東山山荘の造営は、義政の死ぬ延徳2年(1490)まで続くが、全体の完成を見ることはなかったようである。東山文化の粋を集めた山荘はこの後、義政の菩提を弔う慈照寺となり、そのよすがを現在に伝えている。(南 孝雄)



石製導水施設の模式図